

---

# 零の願い

澁谷 優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

零の願い

### 【Nコード】

N 6 6 3 9 H

### 【作者名】

澁谷 優

### 【あらすじ】

——神が存在する世界——日本のとある場所に建設された、東京に代わる新首都、第一市。その市内高校に通う少年、鳴宮儀式。ある日の夜、彼は一人の少女と出会う。仕組まれた運命に抗い、本当の自由を手に入れるための物語。

**第一話：淀み雨（前書き）**

神様物語製作企画：第二弾

## 第一話：淀み雨

東京——そこはかつて、日本の首都だった。

確かにその場所は、日本の首都として居座り続けた。しかし、世界は稀<sup>まれ</sup>に見る大恐慌に襲われたのだ。株価の大暴落、物価の高騰、地方の財政難、政治腐敗、国の借金、カネ、犯罪……。

日本列島は未曾有の混乱に陥った。

そして遂に、東京が崩れた。

日本のとある場所に建設された、東京に代わる新首都「第一市」。  
俺はいつもどおり高校へと足を運んでいる。専<sup>もつぱ</sup>ら自転車やバスでは登校しない昔から歩くのが好きだった。

後ろから俺の方へ向かってくる自転車の数台から、

「おはよう鳴宮<sup>なるみや</sup>！」

とか、

「ちーす、儀式<sup>ぎしき</sup>」

などという元気のいい挨拶が耳元に届く。その呼びかけに、

「おう、おはよう」

と掌を低く挙げながら、平坦な口調で返答する。

そんな朝の短い会話を数回繰り返しながら、高校へ続く長い坂道を黙々と歩いていると、この日一番であろう元気のいい声を投げかけられた。

「儀式オハヨーツ!!」

後ろを振り向くと、そいつの乗っている自転車は既に俺の横に並び、片手で背中をバンバン叩いてきた。

「痛ッ！ 痛いつて！ 叩くのをやめろ朱奈！」  
あすな

おおさき 大崎朱奈——俺の幼馴染で、同じ高校に通っている。朱奈は俺と同じクラスで、その中でも底抜けに明るく、友人も多い。だが、こんな性格とは裏腹に、勤勉で真面目なうえ、音楽的才能もあるらしい。一年ぐらい前に朱奈の家にお邪魔させてもらった時、パッヘルベルのカノンをヴァイオリンを弾いてくれたのだが、かなりの巧さうまだった。

「一応男なんだから朝ぐらいシャキツとしなさいシャキツと！ 幸運が逃げて行っちゃうわよ！」

「一応つて……俺はれっきとした男だ！ それにシャキツとしてないと幸運が逃げるなんて話は聞いたこと無いぞ」

「言っておくけど、あたしの言うことは絶対にハズれないわ」

アハ 何処からこの自信に充ち溢れた言葉が出てくるのだろうか……俺には到底理解できない。

「根拠は？」

「そんなもん無いわよ」

俺の放った疑問は当り前のように返答され、あっさり殺されてしまった。まあ、最初からわかっていたんだ。こいつに質問など通じないのだ……。朱奈は時々、当たって欲しくもない予言を口にすることがあるが、そのほとんどが何故か良く当たる。どうしてだろう……。

「一体どうすればそんなにハイテンションでいられるんだ？ 一応聞くが、お前は平均何時間ぐらい寝てるんだ？」

「そうねえ……だいたい八時間くらいかしら。睡眠不足は美容の大敵なのよ！」

「八時間！？ お前部活終わって帰ってきたら九時だろ！ 勉強とかは？」

「授業だけで覚えられるわよ。全然難しくないじゃない」

こいつと俺は幼馴染だが、今までお互いの私生活までは触れていなかった。朱奈の周りの人間が勤勉だと称賛してるから、家でもさ

ぞかし立派なんだろうなと思っていたのだが……。

「授業だけで十分勉強を理解できる其の脳みそをわけてくれ」

朱奈はその言葉に呆れたようで、バカじゃないのというような顔つきで俺を見つめた。そして、

「脳みそを分けるなんて出来る訳ないじゃない、バカじゃないの？」

表情に出たことをそのまま言葉にしがった。やっぱりお前にボケは通じないのか……。

朱奈はふと何かを思い出したように、雲一つない晴れ渡った空を見上げて徐ろに言った。  
おもむ

「ねえ知ってる？ 今日の夜に大雨が降るらしいわよ。あんた今日傘持ってきた？」

「持って来てない。でもまあ大丈夫だろ。帰るの夕方だしな」

「あたしは自転車の横に傘つけて走ってるから大丈夫ね。雨が降ったら傘を差して帰るわ」

そんな会話をしているうちに学校に到着した。朱奈とクラスが同じということもあり、部活に行くまではいつも一緒なのだ。正直言っただけのことといると疲れるが、結構可愛いし、何より飽きないのだ。

放課後……帰り際の教室には、焼けつく様な強烈な西日が差し込んでいた。

「暑い……」

こんな日は早く家に帰って、涼しいエアコンに当たりながらくつろぎたいと思っていた。帰ろうとした直後、俺の友人が話しかけてきた。

「おい儀式、三丁目のカラオケ屋に早くも新曲が入ったらしいんだ。今から行くんだけどさ、お前も来ない？」

そう言えば、昨日の晩に小遣いをもらった。懐にも余裕ができた

し、いつてやるか。カラオケ屋でもエアコンは利いてるだろうしな。  
「はあ……、わかったよ。行こうぜ」

結局家には帰らずに、カラオケ屋へ直行した。何を歌おうかなと色々考えていたら、もう着いていた。

「今日は声が出なくなるまで歌おうぜ！」

「じゃあまず誰から歌う？」

そんな感じで始まったカラオケ合戦だったが、時間の事なんて誰一人として考えてはいなかった。俺が気付いた頃には、もう八時になっていた。

「おい、八時だぞ！ そろそろ帰らないとヤバいだろ」

「そうだな。今日はもうお開きとついことで……」

俺がカラオケ合戦の終了を宣言した瞬間だった。

物凄い音の雷鳴で地面が地震のように揺れた。その直後に滝のような雨が降ってきた。俺は今日の朝に朱奈が言っていた事を思い出した。

『今日の夜に大雨が降るらしいわよ……』

すっかり忘れてた……。もう、溜息しか出て来ない。

友人の二人は何とか親に話をつけて帰るらしい。その迎えが来た時に彼らの親から、

「儀式君乗っていくかい？」

と言ってもらった。けど、もう夜も遅いので走って帰ることを告げて遠慮した。

俺の目の前は、何も見えないほどの雨が降っていた。俺は学生バッグを傘代わりにして、疲れない程度に、出来るだけ速く走った。街中の光はほとんど消えていた。人通りが無いからだろうか。何故か淋しく見える街路灯や自販機を頼りにして、やっとの事で家までだいたい200メートルの所まで辿り着いた。

「もう少しだ」

疲れない程度に走っていたつもりだったが、結局疲れてしまっていた。そんな体に鞭を入れて、足を踏み出そうとした……。

——その時だった——

俺の横を、何か白い物が通り過ぎたような気がした。

なんだ今の……風か？ その時は気のせいだとは思わなかった。しかし、その瞬間

「邪魔だ！ 其処そこをどけ！」

急に黒い恰好をした二人の男が走ってきて、肩に思いつきりぶつかってきた。

「うわっ！」

俺はぶつかった衝撃に耐えきれずに転んでしまった。何が起こったのか、未だによく分からない内に男達はすぐ傍そばの角を曲がって行ってしまった。

「一体何なんだよあいつら……」

なんでこんな夜に大人が走り回ってんだよ……。不思議でならなかったのだが、そんなことより……。

転んでしまい、おかげで制服は泥まみれになってしまった。気持ち悪い……。

「最悪だ……」

起き上がり、再び歩き始めた。

「きゃあッ！」

悲鳴が微かに聞こえた。

降っている雨のせいではっきりとは聞こえなかったが、水音に混じって次第にその声は痛々しい悲鳴となって耳に届いた。何だ……

何が起こってる？

俺は危険だと知っていて、悲鳴の聞こえた方向に向かって走り出した。興味本位……いや違う。何故か助けないといけないと感じたのだ。

何かしらの本能ってやつなのかもしれない……。

俺はその角を曲がって、思わず足を止めた。数メートル先に何かが見てとれたためだ。雨は一層激しくなって降り続けている。当然視界は悪く、ほとんど前は見えない。俺はじっと目を凝らしてその何かを見つめた。

さっきの男達が何かを取り囲み、殴ったり押さえつけようと手を延ばしたり、その容貌はまるで鬼のようだった。そんな男達に囲まれている何かは、殴られながらも捕まるまいと必死に抵抗していた。

その暴行の対象が目に入るなり、俺の頭に血が昇った。

「何やってんだよ……お前ら……」

## 第一話：淀み雨（後書き）

初投稿です。

なので、文章的にも内容的にもあまり自信はありません。広い心で見てもらえると幸いです。

また、誤字脱字の訂正や感想、辛口コメントなども受け入れます。これからの励みにして頑張っていきたいと思いますので、以後どうぞよろしく願います。

今僕は、Gold And Lapis Lazuliを執筆しているNOTEさんと一緒に、神様物語製作企画を立ち上げました。ちなみに第一弾は、NOTE作：Divine Natureです。しかし、それぞれの物語は連立しているわけでも並行世界として成り立っているわけでもない、独立したものです。

それぞれ世界で神様が登場し、異なる主人公がその世界で活躍していきます。

これから企画作品を宜しく願います。

## 第二話：女の子

雨は激しく降り続いている。そんな中、男達は何かを襲っていた。殴ったり蹴ったり、怒り狂った鬼の様に……。

「何やってんだよ……お前ら……」

俺が不意に発した言葉に気づくことも無く、ただひたすらに何かを襲い続けている。あいつらは何なんだ？ 一体何をしてるんだ？ 未だにしっかりと目には見えないが、その何かがうつすらと見て取れた。肩のあたりまで伸ばした漆黒のショートカットは、近くにある街路灯の僅かな光に照らされて艶めいていた。しかしその髪先は、いかにも適当に切りましたと言わんばかりに不揃いで鋭利だ。服装は……上が白で、下が……赤？ 俺は目を疑った。どう見ても巫女さんが着るような装束を身に纏まとっていた。

「……女の子……か？」

女の子？

俺は男達が襲っていたのが、女の子だと分かった瞬間、頭に血が昇たるのを感じた。大人が二人も、一人の女の子相手に……寄たって多寡かって……。ふざけるなよ！！

「何してんだよ……クソ野郎……」

カラオケで歌った時より大きな声が出て、周辺に響き渡った。怒りだけが込み上げてくる。自然に拳こぶしに力が入るのが分かった。このクソ共を殴り殺したい！！

やっと俺の声に気づいたのか、男達はこっちを睨みつけた。

「何だデメエ……何こつち見てんだよ！ あれ？ さっきぶつかった奴か？」

「お前、クソ野郎って言ったよね？ それ、もしかして俺らのこと？ 吠えるねえ……。なんかいいことでもあったのかなあ？」

「うるせえよ……愚図ども。そこにいる女の子から離れろっつてんだよ」

「はあ？ 愚図どもだとテメエ！ ふざけんじゃねーぞ！！」

一人、俺に殴りかかって来た。振りが大きすぎる。体を少しだけ左側に傾け、それをかわす。相手の拳が空を斬った。

「甘いな。愚図が……」

相手の耳元に冷めた声で囁き、そのから空きの懷に一発食らわした。

「ぐはあッ！」

膝から崩れ込み、地面に倒れ込みながら腹を押さえる。そして悶<sup>もだ</sup>えているそいつの股間に、思い切りに蹴りを食らわす。

「うぎゃああああ！！」

悲鳴を上げて悶絶し、濡れたアスファルトの上を芋虫のように這いずりまわり始めた。俺はそれを尻目に、もう一人の男を睨みつける。

「なっ舐めやがって！ くそガキが！」

女の子を乱暴に放置し、そいつはポケットから、折りたたみ式のナイフを取り出して向かってきた。そして女の子は、疲れ果てたように目を閉じて倒れ込んでしまった。

「面倒くさいのが出てきたな……」

男はナイフを俺の首元をめぐけて、ほぼ水平に斬りつけてきた。

「死ねええ！！」

俺はそれに瞬時に反応し、体制を下げて、相手の足元に蹴りを入れた。

「うわッ！」

バランスを崩し、男は前方に倒れ込んだ。怯<sup>ひる</sup>んでいるところを、俺はナイフを握っている手首を間髪入れずに踏みつけた。かかたに力を入れながら、徐々にそれを強めていく。

「痛い痛い痛い痛い痛い……」

しだいに男の握力が無くなってきたようで、掌からナイフが落ちた。拾い上げて、それを突き付ける。ナイフさえ確保すればこっちのもんだ。

「わッ分かった！ 許してくれよ、な？」

「はあ？ 誰が許すかよ。愚図どもが……」

俺は再び冷めた声で、冷たい笑みを浮べながら言った。男は未だに悶絶している仲間を強引に引き連れて、走りながら逃げに行った。

やっと終わった……。実は言うと、俺は喧嘩や殴り合いとかの荒事がめっぼう強かった。昔引越した時、通っていた学校ではそういう事ばかりしていた。記憶としては忘れてしまいたい事なのだが、体にはその頃の名残がまだしっかりと残っているのだ。

雨はすでに止んでいた。静けさを取り戻した街角には、俺と街路灯の弱い光に照らされている女の子だけ……。

ゆっくりとその女の子の方に近づいていくと、本当に巫女服を着た少女が不格好に横たわっている。さらに近づいて、目の前まで来た。しゃがみ込んで、その女の子の容貌をじっくりと観察する。背丈は俺より少しばかり小さいようだ。雨に濡れてしまったせいなのか、巫女服はもうスケスケで、素肌の色がはつきりと覗える……。丸みを帯びていかにも女らしいのだが、美しく引き締まったその体つきは、濡れて纏わりつく巫女服で強調されて、さらに妖艶さを醸し出していた。エロい……。しかしその体には、まだ男達に傷つけられた跡が痛々しく残っていた。

顔つきは目を閉じているにも関わらず、とても凛々しくて、涼しげな印象を与えた。女子にモテそうな感じがする。

顔の特徴として、気になることが一つあった。その女の子の左目部分は、眼帯に隠されていた。さらにその眼帯の下からは、数本の赤い線のような模様が出ていたのだ。

「何だ？ この模様……」

俺はこれからどうすればいいのだろう。どう対処していいのかわからない。手始めに、その女の子の肩に手を触れてゆっくり揺すってみたが、目を閉じたまま反応しなかった。気絶してしまっているようだ。あれだけ激しくやられていたんだ。無理もない。しかし、このままにはしておけない。どうしようかと考えた挙げ句、家もそう遠くなかったので、一晩自分の家で看病することにした。

俺は女の子をできるだけ優しく背負って、ゆっくりと歩き始めた。

## 第二話：女の子（後書き）

第二話を投稿してみました。

今回の話は、簡単なバトルアクションなどあるので、第一話よりも楽しんでいただけるとおもいます。

誤字脱字の訂正や感想、辛口コメントなども受け入れます。これからの励みにして頑張っていきたいと思いますので、以後どうぞよろしくお願いします。

### 第三話：過去式 弐

(A s p e c t   c h a n g e)

——暗い。光は……何処？ 何処へ行ってしまったのだろう。

数年前まで、私は平和な生活を送っていた。……喜び、怒り、哀しみ、楽しむ。そんな当たり前で、永遠に続くはずだった日常。でも、私にはもう何も無い。日常も、感覚も、力も、光も、何も……無い。感じない。時間の流れさえ止まってしまった世界。感情の欠落、虚無の意識、空ろな心——。

(P e r s o n   c h a n g e)

『只今、緊急事態が発生しました。脱獄者が出たもようです。警備員は速やかに脱獄者の確保に移ってください。繰り返し……』  
警告のサイレンが鳴り響いている。刑務所の幹部は指令室でうるさく怒声を吐いている。

「警備員どもは何を手こずっているのだ！ たかが子供ごとき捕まえられんようでは上に申し訳がつかんのだぞ！！」

「分かっております。しかし相手は子供と言えど、ただの人間ではありません」

「言い訳など要らん！ 我々が欲しいのは結果だけだ！ さっさと捕まえてこちらに差し出せばそれでいい！ 分かったな！」

「了解しました……」

深い溜息を吐いて、一人の隊長は他の警備員に指示を出した。

「捕縛対象はA-67に監禁されていた白帝院零。気をつける、こ

れは戦いといってもいい。油断をしていると殺されるかもしれないぞ。相手はただの人間ではない。総力戦だ、いいな？ 失敗でもしたら上がうるさいぞ。これが終わったら、みんなで飲みにも行く……」

そして彼は走り出していった。

## ／過去式 1

2010年、今から4年前の事だった。私の家を何人かのスーツを着た男達が訪ねてきた。

「ごめんください。失礼ですが、零さんは御在宅でしょうか？」

私の母が玄関に出てきてそれに応えた。

「ええ、います……。何か用でしょうか？」

「はい、とても大事な用が……」

その時、玄関から銃声が聞こえた。大きな音に驚き、私は階段を降りていった。

母は死んでいた。血だらけで、こつちを見ながら……。

「いやあああああ……！」

思わず声を上げ、その場に崩れ込んでしまった。

「ウソ……いやだよ、死なないでよお母さん……！」

男達はそんな私を気にも留めず、ズカズカと上がり込んで家を物色し始めた。

「他に人がいないか調べる。見つけ次第殺せ。終わったらこの娘を  
あの方のもとへ直ちに連行しろ」<sup>ただ</sup>

私はショックで目の前が真っ白になってしまった。声も出せない。男達は物色が終わったようで、私の前に立って上から睨みつけている。いきなり一人の男に髪を引っ張られ、立つように促された。も

う、私は抵抗する気力も失い、引つ張られている痛みも感じず、よろめきながら男達に連れていかれた。

乱暴に車に乗せられ、抵抗できないように手錠まで掛けられた。

「どうして…… どうしてなの？」

私の力のない問いに、一人の男がボソツと答えた。

「これは、お前の運命なのだ」

男はそう言ったあと、ふっと笑みを浮かべた。憐憫？ 侮蔑？  
既に走り出していた車の中で、私は後ろを振り向いた。どんどん家が小さくなる。

ああ…… 離れてゆく。幸せだった日々が、永遠に続くはずだった  
日常が……。

やつとの事で家の前まで辿り着いた。人一人背負ってくるのが、  
こんなにも大変だったとはな……。

それに此処<sup>ここ</sup>まで連れて来たのはいいが、この子はどうすればいい  
んだ？ 怪我もしてるし、気絶してる。今すぐに怪我の手当ぐらい  
はしてあげたい。

しかし、この家にいる俺の家族はどのような反応をするのだろうか。  
多分、ドアを開けた瞬間にはまず、母親の怒声が響くだろう。  
後に続いて妹も……。

いや、今はそんなことどうでもいい。早くどうにかしないと……。  
覚悟を決めて、玄関のドアを開く。

そして、

「儀式、こんな時間まで何処で何をしていた……の？」

ドアを開けた先には、やはり鬼の様な母親が待ち構えていた。さすがの鬼もこの光景には驚いてしまったらしく、目を丸くして沈黙してしまった。続いて妹が登場して、不思議そうに言った。

「儀式くん、その子だあれ？」

すると母親も、

「儀式……その子、誰？」

正直に答えるのは嫌だったので、俺は少し嘘を含めて適当に話した。

「その角に倒れてた。雨で濡れてたし、怪我もしてるみたいだったから、手当するために連れて来た。それに気絶してるから」

「気絶！？ 大変だわ！ 早くその子の中に入れてちょうだい！

儀式、暖房用意して！」

「暖房！？ このクソ暑いのに？」

「しょうがないでしょ！ まず冷えた体を温めてあげなきゃ！」

母親はおろおろしながら奥の方に救急箱を取りに行った。

女の子をリビングのソファーに寝かせて、暖房のスイッチを入れた。

ゴォーっという音がして、熱風が俺の顔に吹き付ける。

「暑い……」

女の子はまだ目を覚まさない……。

### 第三話：過去式 弌（後書き）

やっと投稿することができました。この作品の構造というか、どのように創っていいかわからずと考えていたら……時間が経ってしまいました。投稿ペースも安定させて、引き続き頑張っていきたいと思います。また誤字脱字の指摘、辛口コメントでも構わないのでどんどんください。よい作品を創るために、励みにしたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6639h/>

---

零の願い

2011年10月9日18時06分発行